博士論文（要約）

論文題目　　源氏物語の方法としての時間設定に関する研究

氏名　　林　悠子

目次

序　時間設定の方法と方法としての時間設定　1

第一部　人物造型と時間設定

第一章　六条御息所の人物造型と時間設定　20

第二章　浮舟物語の人物造型と時間設定　32

第二部　源氏物語の時間設定をめぐる文学史的考察

第三章　「新春の哀傷」という発想――私家集から源氏物語へ　46

第四章　求婚譚における時間設定の方法と展開――あて宮求婚譚から玉鬘求婚譚へ　60

第三部　源氏物語の方法としての「喪」の時間

第五章　夕霧物語の服喪と結婚　74

第六章　大君物語の服喪と結婚　92

第七章　二つの「喪」の時間の物語としての蜻蛉巻　111

第四部　方法としての時間設定

第八章　方法としての「日付表現」　126

付録　平安貴族女性が歩くとき　135

本文

（五年以内に出版予定）

参考文献一覧

青島麻子『源氏物語　虚構の結婚』、武蔵野書院、二〇一五

青山一也「朝顔の姫君について」『国文学研究』一九九〇・三

阿部翔子「人が立つとき ― 源氏物語女三の宮の人物造型 ― 」『実践国文学』二〇一四・一〇

安藤徹「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所に」『国文学』二〇〇〇・七

池田節子『源氏物語表現論』風間書房、二〇〇〇

池田節子『『源氏物語』第二部の服飾――衣装の色および「あざやか」の意味するもの――」河添房江編『平安文学と隣接諸学第九巻　王朝文学と服飾・容飾』竹林舎、二〇一〇

石田穣二「正篇から続篇へ」今井卓爾ほか編『源氏物語講座４　京と宇治の物語　物語作家の世界』勉誠社、一九九二

井出千春『『源氏物語』における喪と結婚―除服を中心として―」「源氏物語論―制度論的研究の実践」神戸大学博士論文、二〇一〇

稲田利徳「徒歩より詣づ―「徒然草」第五十二段の解釈とその周縁―」『徒然草論』笠間書院、二〇〇八

稲田利徳「人が走るとき」『人が走るとき―古典のなかの日本人と言葉』笠間書院、二〇一〇

井上英明「物語の出で来はじめのおや」「竹取物語の構成」『列島の古代文学―比較神話から比較文学へ―』風間書房、二〇〇五

今井源衛「「三の宮」のこと」『源氏物語攷その他』笠間書院、一九八九

今井源衛「漢籍・史書・仏典引用一覧」阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』小学館、一九九四～一九九八

今井上『源氏物語　表現の理路』笠間書院、二〇〇八

今井久代「父の姉娘の物語―大君」『源氏物語構造論――作中人物の動態をめぐって』風間書房、二〇〇一

今西祐一郎「哀傷と死―「死」の叙法―」『源氏物語覚書』岩波書店、一九九八

岩原真代「落葉の宮の住環境―夕霧による一条宮邸改築の意義―」『源氏物語の住環境

―物語環境論の視界―』おうふう、二〇〇八・一二
大朝雄二『源氏物語正篇の研究』桜風社、一九七五
大朝雄二『源氏物語続篇の研究』桜風社、一九九一
大朝雄二「源氏物語の方法についての試論―人物の年齢をめぐって―」『国語国文研究』四七、一九七一
大朝雄二「源氏物語・橋姫三帖の構造」『北海道大学人文科学論集』一九八四・二
大井田晴彦「あて宮求婚譚の展開」『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二
大井田晴彦「夕霧と雲居雁の恋――「少女」から「藤裏葉」まで――」鈴木一雄監修・河添房江編『源氏物語鑑賞と基礎知識　三一　梅枝・藤裏葉』至文堂、二〇〇三
太田敦子「女三宮の立ち姿―柏木の死をめぐる表現機構」『野州国文学』二〇〇一・一〇
岡崎知子「平安朝女性の物詣」『平安朝女流作家の研究』法蔵館、一九六七
岡村幸子「職御曹司について―中宮職庁と公卿直廬―」『日本歴史』一九九六・一一
小沢恵右「六条御息所と明石上」『国文学攷』一九七八・三
鬼束（田中）隆昭「源氏物語における死・葬送・服喪の表現」『源氏物語の探究　第七輯』風間書院、一九八二
片桐洋一『小野宮実頼集・九條殿師輔集全釈』風間書房、二〇〇二
加納重文ほか「触穢考―平安中期の状況」『講座平安文学論究』風間書房、一九九六
鎌田清栄「明石の女と伊勢の御息所」『古代中世国文学』一九八四・八
神尾暢子「期間規定と時点規定―「ついたち」と「つごもり」―」『伊勢物語の成立と表現』新典社、二〇〇三
川口久雄「石山まうで」『国文学』一九六〇・七
河添房江「六条院の聖性の維持をめぐって」『源氏物語表現史　喩と王権の位相』翰林書房、一九九八
河添房江「源氏物語の内なる竹取物語」『源氏物語表現史　喩と王権の位相』翰林書房、一九九八
工藤重矩「藤原兼輔伝考（三）」『語文研究』三六、一九七四・二
工藤重矩「若菜以降の紫上の妻としての立場」今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院、一九八九
桑原博史「宇津保物語の和歌――作り物語における散文・和歌の融合の一方法」『国語

と国文学』一九六一・七
小林龍二「浮舟物語後半部の構造―「蜻蛉」「手習」を中心として―」鈴木日出男編『源氏物語の時空　王朝物語新考』笠間書院、一九九七
小山香織「『源氏物語』の女郎花」『むらさき』四一、二〇〇一・一二
久下裕利「夕霧巻と宇治十帖――落葉の宮獲得の要因――」『学苑』二〇一一・一一
久富木原玲『源氏物語　歌と呪性』若草書房、一九九七
栗本賀世子「玉鬘の踏歌見物―宮中参内の意義をめぐって―」『平安朝物語の後宮空間―宇津保物語から源氏物語へ―』武蔵野書院、二〇一四
小林賢章「「夕霧」の巻頭話の日時」『同志社女子大学日本語日本文学』二〇〇二・六
近藤みゆき「手習」考―斎宮女御・和泉式部から源氏物語へ―」『むらさき』四二、二〇〇五・一二
西郷信綱「学問と批評の結び目」『国学の批判―方法に関する覚え書き』未来社、一九六五
坂本和子「光源氏の系譜」『國學院雑誌』一九七五・十二
笹部晃子「明石君と六条御息所」『中央大学国文』二〇〇四・三
佐藤幸子「『源氏物語』蜻蛉巻について―主題の転換点として、巻の意味と方法をめぐって」『平安朝文学研究』復刊七、一九九八、一一
沢田正子「源氏物語の非充足の美」『源氏物語の美意識』笠間書院、一九七九
住谷智「三条院物語試論」『中古文学論攷』一九八三・一二
高木和子「源氏物語における人物造型の方法」紫式部学会編『古代文学論叢』第二十輯、武蔵野書院、二〇一五
高田祐彦『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三
高田祐彦「源氏物語の時間―光源氏と六条御息所―」『国語と国文学』二〇一五、七
高野（鈴木）裕子「大君試論」『源氏物語の探究　第八輯』風間書房、一九八三
高橋和夫「竹取物語構想論―作品中に見られる「数字」による作品再構成とかぐや姫の贖罪の課題について―」『共愛論集』一九九〇・三
高橋由記「「蜻蛉」巻の宮の君―式部卿宮女の出仕―」『国語国文』二〇〇一、二
高松政雄「「中の十日」考」『解釈』一九六六・四
竹内正彦「明石君の「けはひ」」『源氏物語発生史論』新典社、二〇〇七
武山隆昭「「中の十日」の語義攷」『椙山女学園大学研究論集』一九七七・二

田坂憲二「朝顔の姫君の構想に関する試論」『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三
田中新一「季節意識についての不可解な現象」『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房、一九九〇）
長戸千恵子「『蜻蛉日記』の石山詣に関する一試論」平野由紀子編『平安文学新論―国際化時代の視点から』風間書房、二〇一〇
濱橋顕一「『源氏物語』の時間研究をめぐる二、三の問題」『源氏物語論考』笠間書院、一九九七
原田芳起「中古文学語彙雑考（五）―「中の十日」の語義補説―」『平安文学研究』一九七五・十一
原田芳起『平安時代文学語彙の研究（正篇）』一九八八
原田芳起「宇津保物語年立の総括的考察」『宇津保物語研究　考説編』　風間書房、一九九七
原陽子「葵巻における葵の上」『中古文学論攷』一九九四・十二
原岡文子「「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』翰林書房、二〇〇三
針本正行「『源氏物語』の表現―「ゐざる」を中心として―」『伝統と創造の人文科学』二〇〇二
平井仁子「物語研究における年立の意義について」『中古文学』一九七八・九
服藤早苗『平安朝女の生き方―輝いた女性たち』小学館、二〇〇四
福田（森藤）侃子「光源氏と四人の女性」『人文学報』一九六九・二
藤原克己「紫式部と漢文学――宇治の大君と〈婦人苦〉――」『研究講座　源氏物語の視界1〈準拠と引用〉』新典社、一九九四
藤原克己「源氏物語の文体・表現と漢詩文」『源氏物語研究集成』第三巻、風間書房、一九九八
藤原克己「たけき宿世」『人物造型からみた『源氏物語』』至文堂、一九九八
藤原克己「薫と浮舟の物語―イロニーとロマネスクー」寺田澄江ほか編『源氏物語の透明さと不透明さ』青簡舎、二〇〇九
藤村潔『源氏物語の構造』桜風社、一九六六
藤村潔『源氏物語の構造　第二』赤尾照文堂、一九七一

藤本勝義『源氏物語の人ことば文化』新典社、一九九九
増田繁夫「浮舟の出家」『古代文学論叢第四輯　源氏物語と和歌　研究と資料』武蔵野書院、一九七四
増田繁夫「六条御息所の准拠」『源氏物語の人物と構造』笠間書院、一九八二
増田繁夫「和泉式部集を読み解く　帥宮挽歌群」『国文学』一九九〇・一〇
増田繁夫「書評　今井上著『源氏物語　表現の理路』」『日本文学』二〇〇八・一一
増田美子『日本喪服史　古代篇―葬送儀礼と装い―』源流社、二〇〇二
松野彩「服喪期間と喪服の色―実忠と北の方のそれぞれの思い―」『うつほ物語と平安貴族生活―史実と虚構の織りなす世界―』新典社、二〇一五
松野彩「『うつほ物語』と年中行事」『うつほ物語と平安貴族生活――史実と虚構の織りなす世界――』新典社、二〇一五
三田村雅子「召人のまなざしから」『源氏物語　感覚の論理』有精堂、一九九六
三橋正『日本古代神祇制度の形成と展開』法蔵館、二〇一〇
室城秀之『うつほ物語の表現と論理』若草書房、一九九六
室田知香「『源氏物語』第二部後半の『竹取物語』受容」『中古文学』二〇一二、六
本橋裕美「光源氏の流離と伊勢空間」『源氏物語煌めくことばの世界』翰林書房、二〇一四
森一郎『源氏物語の方法』桜楓社、一九六九
森一郎「落葉宮物語―その主題と構造―」『源氏物語作中人物論』笠間書院、一九七九
森一郎『源氏物語生成論―局面集中と継起的展開』世界思想社、一九八六
森一郎『源氏物語の方法と構造』和泉書院、二〇一〇
森田直美「服飾による創造を読み解く―『源氏物語』の「聴色」をテーマとして―」助川幸逸郎ほか編『新時代への源氏学6　虚構と歴史のはざまで』竹林舎、二〇一四
森野正弘「明石の君と歌人伊勢」『源氏物語の音楽と時間』新典社、二〇一四
森藤侃子「槿斎院の初期をめぐって」『源氏物語』桜楓社、一九八四
森本元子「夕霧の巻「入方の月の山のは近きほど」」『平安文学研究』一九七二・六
矢沢勢紀子「源氏物語における時間意識――年始の諸相をめぐって――」『日本思想史学』十一、一九七九・九
山田利博『源氏物語解析』明治書院、二〇一〇
山本幸司『穢と大祓　増補版』解放出版社、二〇〇九

山本登朗「生田川伝説の変貌―大和物語百四十七段の再検討―」『国語国文』一九九二・七
湯淺幸代「憑く女君、憑かれる女君」『夢と物の怪の源氏物語』翰林書房、二〇一〇
吉岡曠『源氏物語論』笠間書院、一九七二
吉海直人「六条御息所と「まことや」」『源氏物語の新考察』おうふう、二〇〇三
吉田幹生『日本古代恋愛文学史』笠間書院、二〇一五
宗雪修三「「椎本」巻における和歌言語の方法」『名古屋大学国語国文学』一九七八・一二

要旨

本論文は、『源氏物語』の時間設定をめぐって、次の二点を考察し、論じようとするものである。一つは、『源氏物語』が物語に流れる時間をいかに構築し、物語内部の時間の持続感や一貫性を確保しているのかという、物語の時間設定上の模索と戦略、すなわち「時間設定の方法」の検討、いま一つは、物語が設定した時間そのものが、物語展開上の方法としていかに用いられているのか、「物語の方法としての時間設定」の獲得と、「方法としての時間設定」が反復されることでどのような方法的な深化が認められるのかについての考察である。全四部・八章と付録から成る。

第一部「人物造型と時間設定」では、人物の年齢や、人物に関わる時間設定が人物相互の対照性の中で提示され、時に一度設定した時間設定と矛盾する設定がされたり、年齢が明示されるまでの間、年齢の印象を場面に応じて操作したりする例を挙げながら、源氏物語の戦略的な人物対照の方法と、それに連動する時間設定の方法について考察した。

第一章「六条御息所の人物造型と時間設定」では、光源氏との関係を共に「似げなし」と感じている年上の女君として類型的に登場する六条御息所と葵の上が、紅葉賀巻で葵の上が「四年ばかりがこのかみ」であることが示されて以降、生霊化する側と生霊に取り憑かれる側である両者の類同性を示しつつ、葵の上の優位性を明らかにしていく様相を追う。さらに、六条御息所が様々な作中人物と対照されながら、一貫した人物像を保ち得ている理由を、対照の組み替えの巧みさの点から論じる。年齢設定の問題を端緒として、より広く作中人物の対照的な造型と、人物造型の一貫性の保持について考察を試みたものである。

第二章「浮舟物語の人物造型と時間設定」では、浮舟物語の東屋巻から手習巻までの巻々に三ヶ月ごとの時間の区切りが設定されている可能性を指摘した上で、対照的に造型されている薫と匂宮が、それぞれ三ヶ月ごとの時間を割り当てられながら浮舟と向き合っていること、さらに、手習巻の中将にも浮舟に対する三ヶ月の求婚期間が設けられた可能性を論じた。一人の女君に対して複数の男君が求愛する際に、同一の時間が割り当てられる例としては、求婚者たちに三年ごとの時間が与えられた『竹取物語』の例があるが、浮舟物語においては、三ヶ月ごとの時間の区切りが意識的に設けられることで、浮舟に対する男君たちに等しく三ヶ月の時間が与えられるのみならず、三ヶ月間の服喪の時間、浮舟が小野に病臥する三ヶ月間など、複雑で重層的な時間を構築することが可

能になった。

第二部「源氏物語の時間設定をめぐる文学史的考察」では、『源氏物語』が先行する作品から引き継いだ時間設定の方法について検討した。**第三章「「新春の哀傷」という発想――私家集から源氏物語へ」**では、『源氏物語』に四回繰り返される、前年に亡くなった近親者を正月に哀悼する場面の発想と表現――Ⅰ年が改まっても悲しみは改まらない、Ⅱ正月を迎えた周囲のよろこびから疎外されて悲しみに暮れている、Ⅲ正月なのに悲しみのあまり「こと忌み」が出来ない、といった発想とそれに伴う表現が、先行する、もしくは同時代の私家集にも認められることを指摘した。**第四章「求婚譚における時間設定の方法と展開――あて宮求婚譚から玉鬘求婚譚へ」**では、Ⅰ求婚譚におおよそ「三年」の時間の枠が設けられていること、Ⅱ「三年」前後の求婚譚の時間の枠組みの中で、二つの物語がそれぞれの方法で年中行事や描かれる季節の景物などの重複を避けようとしていること、Ⅲ五月と九月に結婚が忌まれる「結婚忌月」への意識が両作品に認められ、特に結婚忌月が終わってしまうことに対して、有力ではない求婚者が焦燥を感じることが両方の作品に描かれること、など、二つの求婚譚の時間設定上の共通点を指摘し、考察を試みた。

第三部「源氏物語の方法としての「喪」の時間」では、『源氏物語』に書かれた作中人物死後の時間に焦点を当てる。『源氏物語』は作中人物の死後の追悼儀礼に伴う時間軸――忌籠りの三十日間、四十九日法要、一周忌法要、死者との関係の深さによって異なるが、重服の場合は一年間の服喪期間――を繰り返し物語に取り込んでいる。死の穢れを宮中に伝搬させないために、死穢に触れた男君は三十日間の忌籠りが必要とされたこと、一年間の重服期間中の結婚が社会慣習上禁忌とされていたことなどから、作中人物の死後一周忌までは、時間に対する意識がとりわけ先鋭化される期間であったのである。『源氏物語』は、作中人物死後の追悼儀礼に伴う時間の流れを当時の慣習に従ってほぼ正確に刻むことで、作中人物死後の時間を進行させ、服喪期間という特殊な状況下に起こる様々な問題を描いていく。『源氏物語』の死と哀傷の類型としては、〈女君を亡くした男主人公が哀傷する型〉がこれまでに指摘されて来たが、親を亡くし、一年間の服喪である重服中の女君に男君が求婚する物語をもう一つの類型として指摘したい。第三部では、この〈服喪中の女君が求婚される物語〉の型が見える、一連の物語を分析している。

〈服喪中の女君が求婚される物語〉においては、重服期間中の結婚が禁忌であることが

大きな問題として取り上げられる。とりわけ**第五章「夕霧物語の服喪と結婚」**で論じた夕霧巻では、母を亡くした落葉の宮が重服期間中に夕霧に結婚を強いられるという作中唯一の例が見え、注目される。第五章においては先ず、同時代の歴史史料で、儀式婚の日取りを重服中に設定することが批判されていたこと、親を喪った女性のもとに男性が私通する例があったこと、を確認し、服喪中に結婚する側の立場の弱さを指摘した。夕霧は落葉の宮と強引に通じるが、この時落葉の宮が喪服から婚礼用の装束に着替えさせられ、一時的に服喪を中断させられている。他の重服中の結婚の例では、喪服姿のまま結婚していることが確認出来、異例のことだと考えられる。夕霧は落葉の宮の母の葬儀や法要を熱心に支援する一方、落葉の宮の母のための服喪を全うしたいという気持ちに寄り添うことは出来ない。『源氏物語』では後見を亡くした女君に対し、自らの保護のもと肉親の服喪を滞りなく全うさせることを男主人の美点として重要視する視点が認められるが、性急に落葉の宮を手に入れようとする夕霧の行動は夕霧の〈非主人公性〉を象徴するものと結論づけた。**第六章「大君物語の服喪と結婚」**では、大君物語が大君の父八の宮の死後薫が大君に求婚する前半と、大君の死後、薫が悲嘆にくれる後半に分けられることから、大君物語を〈服喪中の女君が求婚される物語〉と〈女君を亡くした男主人公が哀傷する型〉を組み合わせた物語と捉え、それぞれの方法について検討した。大君物語前半では八の宮ための一年服喪期間が明けた後、一ヶ月の軽服に服す大君に対し、薫が結婚を強行しようと大君を喪服から婚礼用の装束に着替えさせる場面がある。同時代史料から、重服の後の軽服が正式な服喪期間とは認められていなかったことを確認し、重服後の軽服中に薫が大君に結婚を迫る場面が夕霧巻を意識しながらも、薫が夕霧ほどの強引さを持ち合わせていないことを示し、薫と大君が結ばれない物語を描くための方法となっていると論じた。また、女君の服喪と除服を管理するのは後見の役割であるため、中の君の後見として薫を中の君と結婚させたい大君と、大君と結婚して大君と中の君両方を後見したい薫との中の君の服喪をめぐる攻防について考察した。大君死後の薫は大君を看取って死穢に触れたため、八の宮邸に忌籠る。他史料に見える、妻の死穢を避ける例を挙げ、薫の大君を哀傷する思いの強さを指摘し、さらにこの忌籠りによって、大君が薫の公的な妻であると都の人々に認識されていく様相を検討した。

第七章「二つの「喪」の時間の物語としての蜻蛉巻」は、浮舟四十九日までの時間と、蜻蛉式部卿宮薨去後、姪である明石中宮が軽服する三ヶ月の時間という、同時期に始まる二つの「喪」の時間が組み合わせて構成された蜻蛉巻の時間を考察したものである。

明石中宮は叔父の軽服のため三ヶ月間六条院に里下がりするが、服喪中の后妃たちの宮中滞在は、死穢の伝搬を避ける忌籠りの三十日間の後は、禁忌ではなかったことが同時代史料の調査で分かった。蜻蛉巻には、服喪もままならず父宮の四十九日過ぎには女房としての出仕を余儀なくされる式部卿宮の娘、宮の君が登場しており、実の娘よりも姪の服喪が丁重であるという皮肉な構図が構えられている。また、蜻蛉巻の三ヶ月間は手習巻で浮舟が小野に病臥する時間とほぼ一致し、都で宮の君たち女房が男性を誘う花とされる女郎花に喩えられるのとほぼ同時期に、床上げした浮舟が小野を訪ねてきた中将に女郎花に喩えられており、主題と時間の一致が認められることを指摘した。

第四部「方法としての時間設定」第八章「方法としての「日付表現」では時間を表す表現そのものがどのように物語の方法となっているかを論じた。具体的には、「〇日ばかり」「〇日あまりのほど」など『源氏物語』に頻出する日付表現ではない、「〇日」と断定的に示される日付に認められる傾向を探った。「〇日」と断定的に示される日付の中でⅠ明石一族に関連する日付、Ⅱ朧化されていた日付が具体的になる例、Ⅲ吉日が選ばれた例、Ⅳ紫の上の死と葬送に関する日付、について考察し、日付の断定が物語の方法として意識的に用いられている様相が確認された。

最後に原則「歩かない」とされている平安貴族女性が例外的に歩いた例を集め、検討を加えた**付録「平安貴族女性が歩くとき」**を付した。